



鼎談書評

35

六〇年安保闘争のヒーローはその後どう生きたのか

佐野眞一

唐牛伝 敗者の戦後漂流



片山 ノンフィクション作家の佐野眞一さんによる、六〇年安保の全学連委員長、唐牛健太郎の評伝です。北は北海道の紋別、南は与論島や喜界島。流転の人生を追っています。安保闘争がピークを迎えていた六〇年四月、唐牛は国会前の大群衆の

前で装甲車に飛び乗り、「諸君！自民党の背後には一握りの資本家がいるに過ぎない。しかし、我々の背後には安保改定に反対する数百万の学生、労働者がいる」で始まるアジ演説を行ない、「時の人」になりました。ところが国会突入を謀ったデ

モを指揮したとして逮捕され、闘争の終局を拘置所で迎える。その後は居酒屋の亭主になったり、漁師になったり。そして四十七歳で早世して伝説となる。挫折者の栄光といえますか。時代が行きづまって挫折する人が増えると唐牛が繰り返し蘇ってくる。そんな気もします。

宮家 私は五三年生まれで、一浪して東京大学に入学したのが七三年。前年まで駒場キャンパスでは民青がストライキをしていたのですが、この年はストライキ権を取れず、授業も試験も再開された(笑)。七〇年安保の後の保守化が始まり、中核と革マルの闘争は一部で続いていくものの、学生は急激にノンポリ化し、エネルギーを失っていくのです。当時の私が理解できなかった先輩たちの気持ちに本書で触れ、とてもおもしろかった。たとえば「一方で反米意識に心を吸引されながら、一

方でアメリカのような豊かな国になりたいという意識も拭えなかった」という佐野さんの言葉。なるほどと思いました。

裕次郎よりかっこいい

山内 四七年生まれの私は唐牛より十歳下。同じ北海道、そして北大の出身です。唐牛が活躍していた時代の間接的な記憶もあるし、彼の周囲にいた西部邁や青木昌彦は直接知っています。神話化された唐牛を覚えている最後の世代かもしれません。

委員長に就任したときは「石原裕次郎よりかっこいい」と騒がれ、拘置所に映画会社やスカウトに来た唐牛ですから、今であれば世の中が放っておかないでしょう。その魅力は、なんといっても彼の人間力。笑顔が印象的な人ですよ。加えて出世を目指すような山っ気はなく、たい

やまうち まさゆき
山内昌之
(歴史学者・明治大学特任教授)



かたやま もりひで
片山杜秀
(政治学者・慶應義塾大学教授)



今月の ゲスト

みやけくにひこ
宮家邦彦
(キヤノングローバル戦略研究所研究主幹)



へん純粹だった。全学連の委員長は大衆にアピールする世俗的な目線と同時に、全学連のメンバーを説得するための論理的構成力も求められる。そのふたつを兼ね備えた唐牛が登場したのは、幸運な偶然だともいえます。北大まで唐牛をスカウトにいった、ブント(共産主義者同盟)書記長の島成郎は慧眼です。

片山 島の説得に、唐牛の返事は「皆が賛成するなら、自分としてはやってみたいと思う」。史上最年少、二十二歳の全学連委員長誕生でした。

山内 唐牛が東大や京大でなく、北大というのも興味深い点ですが、そこはあまり書かれていません。おそらく東京出身の佐野さんには、五〇年代、六〇年代の北海道と北大の個性をうまく掴みきれなかったのでしょう。「わざわざ東大に行かなくても、北大があるから十分さ」と唐牛も言っていたそうです。当時の北大生には、自分たちは東大や京大に準じる帝国大学に通っているという矜持もありました。偏差値によって行ける大学を選ぶ今はまったく違。東京の私大をわざわざ目指すのは一般的ではなかったのです。

一方、海によって本州から遠く隔てられていたのも事実。小樽出身の伊藤整が『若き詩人の肖像』で書いたように、青函連絡船で函館から青森までまず四時間。列車に乗り換え、あれこれ東京まで十数時間。苦労の末に上京した伊藤が味わった屈

折感は、程度の差はあれ、北海道の人間なら多くが経験したことでしょう。こうした自我意識と鬱屈感が混ざり合っているのが唐牛健太郎なのです。くわえて、芸者の息子で庶子だというルーツも、影響しているかもしれませんね。

「何か面白いことはないか」

片山 その複雑な「人間力」で唐牛は多彩な人物を周りに呼び込み続けます。山口組の組長、田岡一雄や、日本の黒幕、田中清玄。亡くなる直前には徳田虎雄と親密になります。

山内 左翼の全学連が、転向右翼の田中から資金提供を受けていたとスクープしたTBSラジオ「ゆがんだ青春」が話題となって唐牛らは世間の批判にさらされますが、金がなければ運動はできないという言い分もあります。当時、仲間の保釈金を

どう工面するかはひじょうに切実な問題で、石原慎太郎や鶴見俊輔も寄付している。吉本隆明はラジオをきっかけに大々的に全学連批判を行なった「アカハタ」を「エロ新聞なみのひわいな中傷記事」と批判し唐牛と全学連を一貫して擁護していません。吉本の主張は、現場にいた者でなければ分からない歴史の重みを理解せよということなのでしょう。

片山 欲を言えば、安保後の唐牛のしたこと、しなかったことにもっと突っ込んで欲しかった。同世代の闘士たちのその後の方が濃密で(笑)。北海道や鹿児島での唐牛の生きざま、漁師の暮らしや、「辺境」の風土。民俗学者の宮本常一に傾倒してきた著者らしさが今ひとつ発揮されていないような。「何か面白いことはないか」が口癖の唐牛ですから、晩年に打ち込もうとした教育の仕事についてもっとポジティブに描けるはず。

著者は安保後の唐牛を隠者としてイメージしすぎることで能動性をつかまえそこねている気がします。

山内 ただ、唐牛はいい時期に亡くなったのかもしれないよ。人は死ぬ時期を選べませんが、唐牛は若過ぎた死が伝説となったとも言えます。

宮家 残酷ですが、真実ですね。

自ら学ぶロボットが、金融市場でひとり勝ちする未来

櫻井豊

人工知能が金融を支配する日

宮家 日本でも「フィンテック」(Finance + technology) という造語はずいぶん知られてきましたが、この本を読むと、現代の金融においていかにテクノロジが不可欠になっているのかよくわかります。

外務省にいた一九九四年、私は金

山内 安保闘争で多くの学生が人生を狂わせ、樺美智子さんは亡くなった。闘争後に転向して大学教授や経営者として活躍した仲間とは百八十度異なり、独楽のようにくるくる回る人生を歩んだ唐牛は、心のどこかで全学連の負け組に懺悔と鎮魂の心を持ち続けていたように私の目には映ります。



人工知能が金融を支配する日
東洋経済新報社
1600円+税

融サービスマジ貿易交渉に交渉官として携わっていました。その後、WTOでの合意をきっかけに、大蔵省は六年に金融の自由化を進める、いわ

ゆる「金融ビッグバン」を実施します。それから二十年、金融はここま

で変化したのかと驚きました。登場するのは、人間が「教える」ことによって学習するのではなく、アルゴリズムが自分で投資の判断を行なう「ロボ・トレーダー」や、ビッグデータを分析して顧客の資産運用に助言を与える「ロボ・アドバイザー」など人工知能を利用したロボットと、それらを使って資産家たちの巨額の富を動かしている欧米のヘッジファンドです。

近年の人工知能の進化は著しく、今年に入ってグーグルの子会社が作った「アルファ碁」が囲碁の欧州チャンピオンや韓国のトッププロから勝利をあげました。ビッグニュースですよ。金融の世界では欧米のファンドが理系の研究者を引き抜いてAI開発にしのぎを削り、運用そのものを機械にやらせようとしている。

鼎談書評

超高速ロボ・トレーダーは数百ナノ秒で取引を行ない、勝率も高い。従来の金融市場ではウォール街の金融機関や日本のメガバンクが主役で、ファンドはその顧客にすぎませんでしたが、ロボットの登場でファンドがひとり勝ちし、主役に躍り出る可能性も出てきた。金融界を根本から揺るがせる大きな変化です。

山内 このスピード感では、日本の個人投資家を示す言葉として話題になった「ミセス・ワタナベ」なんて、到底生き残れないね。ロボットと聞くと、つい人型の「ASIMO」などを連想してしまうけれど、最前線はまったく違う世界になっている。

宮家 人工知能の進化によって、人間と機械の関係は根本的に変化するでしょう。人間がロボットを使うのではなく、ロボットが能動的に学んで動く。すごいことですが、一方で恐ろしいとも感じます。

行で大蔵省の担当、いわゆる「MOF担」をしていた大学の同級生に尋ねたところ、「ああ、大蔵省の人間もほとんど知らないから、知らなくても大丈夫」と言われました(笑)。

現代の金融の最前線は、以前にもまして理系出身者を必要としています。しかし財務省や銀行に経済学博士はいても、相変わらず理系の博士はほとんど見かけない。文系中心の世界で使いこなせないのでしょうか。

山内 省庁はもとより、日本の企業のリーダーの多くは文系出身です。最近、工学系の出身者も出てきましたが、物理や数学など純粋な理学系はまだ少ない。ところがフィンテックの世界は、数学的あるいは物理的な発想ができれば戦えない。なししろ「ベイズ推定」がAI開発の基本だといえけれど、我々にはベイズ推定が何かさえわからない(笑)。

宮家 文系に求められることは、

片山 知的労働も単純労働も、正確さや経済性を追求すれば、みんなロボットになってしまふ。そんな人間不要時代がもう目前なのでしょう。ピケティの師匠のアトキンソンが、労働組合の力を高めてロボット化を阻止すべきと主張していると思いますが、本書を読んでその通りと思いました。しかし国際金融に限れば人間は電腦に負けるに決まっていますからね。資本主義やめですか、ロボットやめですかみたいな話で(笑)。

山内 十九世紀初頭に産業革命に反対して機械を打ち壊した、イギリスのラッダイト運動さながらだ(笑)。

片山 ラッダイト運動は失敗しますが、当時は産業革命の先に第二次産業、第三次産業と雇用が広がって行く無限とも思える可能性があった。ところが現代社会でロボットに駆逐された人間には、多分その先がない。

年功序列を廃止し、理系に仕事を任せて自分は退き、責任だけ取ることをですが……。

山内 それができないのが日本です(笑)。

宮家 とはいえ理系には理系の弱点もあって、文系に比べると人付き合いが苦手な人も少なくない。

片山 ええ、ソーシャルな調整能

宮家 国家と人間との関係も、新たなモデルにならざるを得ないかも

しれませんよ。たとえば国民はすべて生活を保障された国家公務員になり、ほとんどの仕事はロボットが行なう。もしくはロボットが独裁者になって、人間社会を支配する。

片山 そして人工知能が弾き出した必要数しか人間は生存を許されな

い……とくれば、これはもうSFでおなじみのディストピアです(笑)。

大蔵省もほとんど知らない

宮家 残念ながら、本書ではフィンテックの実情に日本が疎せざる指摘されています。これは今に始まったことではなく、金融ビッグバンの頃も十年は遅れていました。当時は、オプションやスワップなどの金融派生商品「デリバティブ」が最先端。さっぱりわからなかったので銀

力がなくて、常に真実を口にしてしまふというか。しかしロボットが曖昧性や情緒や雰囲気や連想術について学習を深めて、文学も音楽も思索も表情豊かな演技さえこなすようになれば、文系人間はことごとくロボットに取って代わられてしまふ。我々三人は既に塵つぶちではないですか(笑)。不安は募るばかりです。

綿密な取材から読み解く、史上最悪の大統領候補の素顔

ワシントン・ポスト取材班ほか 野中香方子ほか訳

トランプ



文藝春秋
2100円+税

山内 いよいよアメリカの大統領選が十一月に迫ってきました。最近の調査ではトランプがクリントンを急激に追い上げ、一部では逆転した

鼎談書評

とも言われています。ひょっとしたら大統領になってしまふトランプとは何者なのか、その本質が描かれているのではないかと期待して読みました。ワシントン・ポストの記者たちが、小学校の同級生に始まり、トランプと関わった大勢の人びとにイ

ンタビューして、読み応えは十分です。読めば読むほど、史上最悪の大統領選だという確信は深まるばかりでしたが(笑)。

宮家 留学していた一九七六年以来四十年にわたって大統領選を見てきましたが、これほどレベルが低い選挙戦ははじめてですよ。

山内 メキシコとの間に壁を作るなどトランプの過激な発言が注目を集めていますが、自分の主義や主張を絶対に曲げない点は小さな頃から一貫しています。口に出すのは悪態ばかり。狙った不動産は違法ギリギリの手段で手に入れ、逆らう人間はためらわずにクビにする。経営するアパートに黒人を入居させなかった父親の影響もあるのか、人種差別的な発言も繰り返してきました。

ただ、トランプの人生を詳細に追っても、政治家を志す理由は見えてこない。本書の多くも、金とオンナ

男、J・F・ケネディを超えるには大統領になるしかない、という程度ですね(笑)。

トランプが勝つ予感

片山 ところが大統領選の本選までのぼりつめてしまうのが、現代の民主主義の恐ろしいところです。格差が拡大し、中産層がひたすら崩壊しているアメリカでは現状に不満を持つ下層が多数派になっていってよいでしょう。彼らは大局的判断などというものは無縁ですよ。誰もが平等な一票を持って総数を競う民主主義ではトランプのような人が当選する可能性が大きくなります。良識家はトランプの発言に眉をひそめ、本書を読めば「ほら、やっぱり」となるでしょうが、トランプ支持者はこんな厚い本はまず手に取りません(笑)。本書の内容は伝わ

の話(笑)。妻と愛人がクリスマス休暇中にリゾート地で出くわし罵り合う場面など、もはやコメディのようでおかしくなりますよ。結婚は三度して、「離婚」と「秘密保持契約」という章もあるくらいです。トランプほど、好色さが自分の評判を高めると信じている男性も珍しい。

片山 政治家としてはともかく、実業の世界では才能が豊かなのかと思ったら、こちらもほとんど崩壊していることがわかりました(笑)。「アプレンティス」で甦るのですが、視聴率を毎週気にかけて、何をすれば話題になるか熱心に考えるところなど、広告代理店の敏腕営業マンのようでもあります。トランプを凄腕の実業家と信じ込んだ視聴者が、彼を支持しているのでしょうか。

宮家 過去半年のあいだにトランプについての本が大量に出回りました。日本も最近その傾向が著しいですが、アメリカは特にテレビ受けするワン・フレイズを口にする人の人気が高く、一度失言しても、次におもしろいことを言えば簡単に人気を回復します。読めば読むほど、トランプが勝つと思えてきました。

山内 日本の政治家に例えると、誰に似ているんでしょうね。宮家 うーん……なかなかいませんが、石原慎太郎さんと橋下徹さんを足して二で割ると近いかもしれません。

山内 日本が駐留米軍の経費の半分を負担していることを知らなかったトランプが「なんで全部出さないんだ」と言って笑い話になりました

たが、おそらくこれほど包括的なものはありません。ワシントン・ポストお得意の調査報道で、編集主幹のボブ・ウッドワードも加わり、一読の価値があります。

豊富な証言からわかるのは、常にトランプが「どうやったら目立てるか」しか考えていないこと。終章近くに立候補してからの経緯が出てきますが、そのほかの四〇〇ページ強に、トランプの政治的資質や信条が読み取れるエピソードは皆無です(笑)。政治家ならば、有権者や支持者の利益のために自分を殺してでも「政治」を行なうのが普通ですが、トランプは常に自己の利益を優先し、人を犠牲にして結果を出す。つまり、彼は政治をやっていないんです。機を見るのは達者ですが、なぜ大統領になりたいのか、最後までよくわからない。

山内 アメリカでいちばんモテたが、もし大統領になったとき、日本はどのように接するべきなのか厄介です。冗談ではすまなくなる。

宮家 恐ろしいのは、アメリカがますます内向きになり、孤立主義を深めること。国際的なエンゲージメントを減らし、同盟国にはさらなる出費を要求するでしょう。トランプの発言からは、すでにその匂いがぶんぶん漂っています。日本が一对一でトランプと対峙するのではなく、ヨーロッパや中東、そしてアジアのアメリカ同盟国と一致団結して孤立主義に反対することが重要です。負担の分かち合いは維持すべきですから。

片山 クリントンが勝っても、アメリカの世界での存在感が低落して行く中長期的傾向は変わらないでしょうし、そろそろ真剣に考えておかななくてはいいけません。

山内 ますます大統領選の日が恐ろしくなってきました(笑)。

鼎談書評